

在米日本人留学生における留学前・中・後の異文化適応とソーシャルスキル使用 —セッション参加事例を対象とした縦断調査—

高濱 愛 (一橋大学)・田中 共子 (岡山大学)

1. はじめに

筆者らは、アメリカ留学予定者に対する準備教育の一つとして、アメリカン・ソーシャルスキル学習セッションを提供する試みを続けてきた(高濱, 2011)。これまでに、交換留学生を対象とした第1期および第2期セッション、語学研修生を対象とした第3期セッション、および一般教養教育科目として実施された第4期セッションについて報告してきた(高濱・田中, 2011a)。ここではセッション中の学生の反応や、渡米後の現地での様子を分析した。しかしこれらの報告は、セッション参加者のある時点での状況をとらえた横断調査であり、個別の学生における経過をたどったものはなかった。そこで本稿では、第2期セッションに参加した日本人女子大学生2名における、留学前・中・後(帰国後)の時点での様子を縦断的に検討してみた。留学後の様子として帰国後3か月および9か月の2時点に焦点を当てながら、留学前・中の状況をあわせて見ていくことで、スキル使用と適応の推移について検討をおこなう。

2. 方法

セッションの詳細は高濱・田中(2010, 2011b, 2012)で報告済みであるが、以下にセッションの概要の抜粋を記し、さらに5回にわたる調査の流れを示す。

参加者 200X年某月の2日間に行われた、第2期セッションに参加した日本人女子学生4名(S11, S12, S13, S14)のうち、2名(S13, S14)を今回の分析の対象とした。他の2名であるS11とS12は、再留学および遠隔地に就職のため、帰国後9か月の調査に参加できなかったため、分析から外した。セッションでは「先生に質問する」「交渉する」等の9つのスキルについて、英語でのロールプレイを通じて学習した。彼らはその約1か月後に渡米し、全員Y大学で約10か月間、交換留学生として学んだ。

手続き S13とS14の2名における留学前(①セッション参加直前、②セッション終了直後)、留学中(③渡米後8か月)、帰国後(④帰国後3か月、⑤帰国後9か月)の5時点において、留学生活や日常生活の様子を尋ねる調査を行った。①②③の結果は、高濱・田中(2010; 印刷中)に報告した。①②③⑤は面接調査と質問紙調査、④は郵送による質問紙調査である。④⑤の質問紙では、帰国直前におけるスキル使用や留学の感想等をたずね、⑤の面接では、その回答について1時間程度の聞き取りを行った。

3. 結果と考察

3.1 留学の意味づけ

セッション申し込みの時点で彼女らは、留学の目的として「いろいろな人と出会う(S13)」「英語を磨きつつ国際関係について学ぶ(S14)」を挙げていた。留学中の調査においては、留学を「楽しい」と語った(高濱ら, 印刷中)。帰国後調査④では留学を前向きに評価しており、⑤では留学をエンジョイできた、有意義なものであったと認識していた。留学全体を振り返って、「やりたいことをやりきった(S13)」「行ってよかったと思います(S14)」と述べ、達成感や満足感を語った。

3.2 ソーシャルスキル使用

彼女らは、セッション中に学習したほぼ全てのスキルを、実際に使用していた。滞在先での社会文化的文脈に即した考え方や行動パターンを取り入れながら、留学初期から現地での友人作りに努力していた(高濱ら, 印刷中)。帰国後の調査④⑤で留学生生活を振り返ってもらった際には、留学後期から終盤におけるスキル使用が確認された。留学で得たものとしては、「友達」「人脈、人のつながり」を挙げた。対人関係への関心と意欲が高く、留学の意義や手応えを人との繋がりで

の中に感じていたことがわかる。

3.3 異文化適応と逆カルチャーショック

留学中の異文化適応の状態をたどると、渡米後には適応に支障・困難をきたしたとする語りは見られず、カルチャーショックは顕著でない。一方で、帰国後調査⑤においては、「燃え尽き症候群みたいな感じ（で）将来どうしよう、となつて不安に(S13)」なったり、「(帰国後)最初の3か月とか本当にこれからどうしよう(S14)」と思ったりするなど、不安定な心理を報告している。2名とも、精神的ストレスの蓄積から通院が必要なレベルまで体調不良になったという。留学先ではセッションであらかじめ学習していたスキルを行使し、対人関係の構築・維持・発展に積極的であった。留学中も帰国後も、一貫して自分の留学経験を肯定的にとらえていた。能動的に関わった留学を、得るものの多い体験として受け止めているが、対人関係への注目には特に高い。

3.4 縦断的な観点からみた適応支援

留学生生活の充実をもたらすには、留学前の関係性形成への教育的支援が有用と考えられる。留学期間を良好に過ごした健康な学生の例で、帰国後の逆カルチャーショックが確認されたことから、留学前のみならず帰国後のサポートの提供が、留学生教育の課題といえる。留学生の経過を総体で捉えたトータルケアの必要性を指摘したい。

参考文献

高濱愛 (2011) 『日本人留学生を対象とする文化行動学習プログラムの開発と実践』2007～2008年度科学研究費補助金(萌芽研究)研究成果報告書

(<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/19324>)

高濱愛・田中共子 (2010) 「米国留学予定の日本人学生を対象としたソーシャルスキル学習」『一橋大学国際教育センター紀要』創刊号、pp67-76.

高濱愛・田中共子 (2011a) 「派遣留学生の教育的トータルサポートシステム構築へ向けて：日本人留学生を対象とした留学前および帰国後教育プログラムの試み」ウェブマガジン『留学交流』2011年7月号

(http://www.jasso.go.jp/about/documents/aitakahama_tomokotanaka.pdf)

高濱愛・田中共子 (2011b) 「米国留学準備を目的とした短期集中型アメリカン・ソーシャルスキル学習セッションの記録(1)ー自己紹介と対人関係の開始に焦点を当ててー」『一橋大学国際教育センター紀要』第2号、pp. 123-132.

高濱愛・田中共子 (2012) 「米国留学準備を目的とした短期集中型アメリカン・ソーシャル・スキル学習セッションの記録(2)ーアサーションに焦点を当てて」『人文・自然研究』6号、pp. 144-163.

高濱愛・田中共子 「米国留学前ソーシャルスキル学習セッション受講生の留学生活一対人行動と対人関係を中心に」『異文化コミュニケーション研究』第24号、印刷中

謝辞 本研究は科学研究費補助金萌芽研究 No. 19653099 (代表・高濱愛) の助成を受けた。